

いまうばすて



「きょうも柵たなぼこ経けいかい？」

正伝庵しょうでんあんの白壁しろかべ前まへを、ひよいと飛び出た少年の墨染め姿に、「ご苦勞くるわうはんなあ」と大八車おほやちぐるまのスエだつた。

街道は大路小路にさよならして、なだらかな尾根筋を、のんびり、北に走っていた。さして広くもない、馴染みのオート三輪でさえすれ違ちがうのがやつとの上り下りに、低棟ひだてのくすんだ紅殻べんがら町家が軒を連ね、途中いくつか、仕舞屋格子しもたやにばったり床几しょうぎのかかるのも、どこか山合やまがいの宿場町を思わせて、少なくともなつたが桶屋や醤油屋の軒先には地を掃かんばかりに、利久鼠の長暖簾が梅雨明けの通り風に揺れていた。

南に開けていたから陽ひ当あたたりがよかつた。そしてゆるやかに帯を走らせたようにまっすぐだから、かかりからもどん突きが白く眩くらしく光るのもほかとちがつて、行き着く先の目安になっていた。正伝庵の白壁で、なだらかといつても、そこはやはり尾根筋だから、半ばまではそんなでなくても、あとは知らず知らずに迫せり上がり、やがて丁字路手前で胸突き八丁、手ぶらでも一休みしたくなるというのに婆おばさんは荷車にぐるまだつた。

姐ねえさん、いらんかえー、

朝も早くに、畑でとれた野菜をあれこれ、大八車に山と積んで大路小路を売り歩く。そんな牽ひき売うりの声に街の一日ははじまる。といつてもいろいろで、街道下を東に、家並みのきれい

な商家筋を得意にする女が多かったのに、婆さんは西の機屋町はたやまちに入るのが好きだった。もちろ
んそこにも同業が三、四人、いるにはいたが、別段、取り決めがあつたわけでもなく、野菜も顔
かたちがちがつたからか張り合うこともなく、互いに通い慣れた堅町横町たてまち、いつものように荷
車牽いて歩くだけ。すると帰りは決まつて、どん突き手前で十時を回つた。そんなことをもう
五十年近くも続けている。だから車輪くるまもぎいぎい鳴いて、年季の入つた荷台には、大人が膝を
抱えて屈めるほどの四つ目籠くもが前後に六つ、荒縄で括くられ、葱や水菜の残り葉が籠目のほつれ
に、がた、ごと、がた、ごと、荷車音頭に躍つていた。

「ほんーま、きつつい坂やな、鼻の穴が十とむほどほしいわ」

いつものことだが愚痴もこぼれ、脇の醬油屋の軒先に、よた、よた、寄せると、
「よっこらせつ」

と、ぱったり床几に腰を下ろした。

「ちいーつと、借りまつせえー」

声をかけたが返事がない。が、それでよかつた。床几はいつもあるとは限らない。偶たまには脚
をたたんで紅殻柱の丸鑢かたに引つ張り上げたのもあるにはあつて、そんなときには容赦なく、

ごめんやつしやー、

と勝手に下ろす。そうして咎とがめる者もない、ぱったり床几はどこも同じに、道行く者の氣儘

にあつた。

「ふうーっ」

息を吐くと、頸の手拭いで日焼けた額の汗を拭いた。足元を街道下から涼風が、さわ、さわ、抜ける。

「極楽の余り風、極楽の余り風……」

満足そうに婆さんは一人呟いて、右に左に上り下りを眺めていたが、一人のかすめる影もない。やがて、ほんつと一つ、白手甲で膝を打つと、

「ほな、行こか」

励ますように一声かけて、くの字に曲がった腰を上げた。

正伝庵の西隣、スエは一人息子の真之介といっしょだった。家数も知れている、街道終ての小さな村だが、それでも長屋門を構える旧家も見えて、スエの家も母屋のほかに離れや土蔵も毀れかけてはいたがあるにはあつた。無論、田畑もそれなりに続いていた。けれどそちらは人任せに、一人、屋敷裏の二反田に季節の野菜をつくるだけ。夫の種治郎は遠の昔にいなかつた。戦争も終わりに赤紙が来て大陸に渡ったきり行方が知れず、十年ほどしてリュック一つでひよっこり戻つた。大陸各地を戦い、半島近くで終戦を聞いたがシベリアに送られ、それが、帰つて明くる年の秋口だった。厳しい収容を耐えたというのに、妻子の顔を見ての気の緩みだつ

たか、風邪をこじらせ、ことりと死んだ。夢か現か、スエには哀しむ時間もなかった。そして十余年、遅くに生まれた息子も立派になって、街道下、電車通りの地銀に勤めていた。父親似の端正な細面に六尺近い上背の、親目にも申し分ない男だった。それが手をかけ過ぎたのがいけなかつたか三十を過ぎても嫁もとらず、もちろん上の学校にも行かなかつたから給料もさしてなかつたが、母子二人暮らしには十分過ぎて、少しの田畑の入りもあつて、だからスエには百姓を続ける理由もないのに、雨風にも鍬を担いで出るのがだった。

「草、生やしといたら、隣近所に恥ずかしやろが……」

世間体をいつたが、本音はちがつて、そうするのが家守の務めと夫の留守にも我と我が身を律してきた慣れが抜けきれないだけ。だからよほどのことでもない限り、朝も五時には蒲団を抜けて野菜をとり、飯も竈の肩を卓袱台代わりに立ったまま掻き込むと大八車を牽いて出る。端から見ればきつい日々だが、逆にそれがスエを達者にしていたともいえる。だから格好もかまわない、年中同じ半纏もんぺに地下足袋脚絆。病気で寝込むことなど一度もなかつたが、先年、納屋の三和土に転んで腰をむさんこに打ちつけたのが尾を引いて、それを庇うからか、蟹股がさらにひどく、歩くと肩が大きく揺れた。

「氣いつけて行くんやでー」

脂黒の齒莖を剥き出しに笑顔で送る。それに少年は少しの会釈で応え、駆けるように街道を

下った。三月前、正伝庵の紹明が門前に拾った童行小僧で、生来の内気からか人を見ると逃げようように先を行く。頭は丸めてもまだ子どもだった。

行き先はスエにもわかつていた。蘆山回りといって、学校の休みの日には柵経回りに走っている。年端もいかない喝食小僧に少し酷な気もしたが、田舎育ちをまずは人目に馴らせてから、と紹明の計らいだった。

街道を下った先の機屋町、それも西の外れの蘆山地区は、新しいようだけれど古かった。昔、平安貴族の野駆けの牧に拓かれたのが、江戸の初めに真言寺の寺領になって、それを明治に入って商家筋の大店が譲り受け、三十棟ばかりの紅殻長屋を目刺しのように並べて建てた。だから地名もないまま、蘆山といったのは傍を走る通り名に拠っている。間口もようやく二間半、奥行きも五、六間あるかなしかの町家が六軒そして八軒とハーマモニカの吹き口のように軒を連ねる。表からはふつうの平屋のように見えた。それが中に入ると二階家で、上がり端から隅の仕込み階段を上がると、天井は低いが通りに面して虫籠窓の開いた続き部屋もあって、だから中二階建てといって、多少の見劣りはあったにせよ、ぱっと見には東の商家筋とそんなに変わらない、昔は流行の町家だった。

ちがっていたのは、蘆山の場合、職住織り交ぜの機屋だったこと。だから織屋建てともいって、玄関を入った先、通り庭のどん突きが、八畳足らずの真ん中に、二尺ほど四角に凹んだ土

間になつていた。埋め機を据えるためだが、どの棟も同じ造りの賃貸し長屋、隣とも背中合わせの薄壁一枚、階段の上り下りはもちろん、ときには秘したい物音までも筒抜けで、姿はなくても様子が知れた。そして向かいとも、夏は夕涼みに縁台を、出したはいいが、鼻先を道行く袖がかすめて通り、軒下に簾はよかつたが、夜には丸見えの、文字通り裸長屋だつた。

スエが消えたのは、それから一月あまりのことだつた。いつものように裏の畑に出たのをあとに、夕方、真之介が帰つたときには家に灯もなく、慌てて薄暗がりの畑はもちろん、隣近所を尋ね歩いたが影もなかつた。焦つてはみたものの術もない、その夜はまんじりともせず、明くる朝、駐在に届けたその足で正伝庵に回っている。

「和尚さん、いはりますか」

庫裡の大戸を開けると、奥で雑巾掛けでもしていたか、作務衣の裾で手を拭きながら小走りに現われた。

「なんや、真之介か、こないな早ようからどないした？ きようは休みかい」

「いえ、そうやないんで」

いいにくそうにした。

「その……、母親が、昨夜から居よりまへんね」

んっ？ 紹明は首を傾げた。

「居よらんで、どういふこつちや？」

「それが……」

真之介は口籠もった。

色白で長軀の真之介はなかなかの男前だった。だれが見てもそう思っただろう、別段、内気なわけでもなく、母子育ちだったが、といつてべつたりというわけでもなかったから不思議だったが、三十も半ばを過ぎたというのにもう一つ頼りなかった。

「昨夜、去んだら家の中が真つ暗で……、今朝も、あつちこち訊きに回つとるんですが、埒が
あきません。それで、どないしたもんか、まずは和尚さんにご相談を、と」

紹明は慌てた。

「相談も何も、そら、えらいこつちやぞ。駐在には届けたんか」

「はあ、いま、下之町に行つてきたんですが、それが……」

「それが、どないした？ おいつ、はつきりいわんか」

いつもののんびり調子に苛ついた。

「なんちゆうか、事件性があるかどうかわからんもんを、直にどうこうできん、と」

「そら、そやろが……」

紹明は迷った。が、すぐに断を下している。

「おいつ、こんなことしとれんぞ。わしやあ、こつちの町会長に頼んでみるよつて、おまえは、土居町の方にもあたってみい」

尻を叩くようにして送り出した。

隠寮に走ると、マチ子は蒲団の上に起きていた。

「スエさん、居なくなつたんですか」

玄関とは一間置ひつまくだけの隠寮だから話も筒抜けで、もうずいぶんになる、マチ子はリユーマチで寝込んでいた。ただ、その日は調子もいいのか、丹前を肩掛けに顔色もよかつた。

「ああ、難儀なことになつた」

いいながら作務衣を脱ぐと、隅の衣桁に手を伸ばし、法衣をとつた。

「あいつもええやつやが、もう一つ要領を得んでな、これからちよつと町会長に会うてくる。人を出してもらわんならんからな」

隣近所とはいえ、まずは頼み事だから格好だけでも礼は尽くさねばならない。それでも敷居を出るとマチ子の方を振り返り、

「大丈夫か？」

と、気遣いを忘れなかつた。

参道を出て二筋目の路地を入ると、胸丈ほどの姥目檜うばめがしの垣根越しに中の様子が窺えた。村中むらなかはどこもそんなふうで、村瀬は縁側に背中を丸めて新聞を広げている。何代も続く庄屋筋で、いまは息子に代を譲つての隠居暮らし。事を話すとすぐに動いてくれ、狭い村にも合わせて七人、男衆が集まつた。いずれも村瀬と同じ隠居連だが、根っからの百姓とあつて足腰の方はまだまだしつかりしている。

「やあつ」

ぺこりとお辞儀して、

「えらいことになりましたな」

地下足袋やゴム長に、腰には荒縄をぶら下げ、鎌を手にしている者もいれば、作業スボンの後ろポケットに懐中電灯をねじ込んでいる用心者までいた。山狩りを思つてのことだろう、百姓に林業も兼ねる者ばかりだから山は手慣れたものだった。

ただ、山狩りといつても道を頼りに行くしかなくて、村外れを北の氷室ひむろに抜ける杣道と、これも行き着く先は同じだが、少し手前を峠越えに向かう新道しんみちしかなかったから、まずはスエの屋敷に一番近い新道からあたつてみることにした。一方、真之介は紹明と別れたその足でまっすぐ土居町に走つたが、町会長が留守をしていて副会長の家に回っている。ただ、そこでも色好い返事がもらえなくて、街道筋を軒並みにあたつてみた。すると桶屋の若主人と醬油屋の見

習いが加勢してくれた。

「よろしおす、で、どっから行きまひよ？」

気のいい若主人は、すぐにオート三輪を表に出した。村のどこかだとすれば、もう人目についてもいい頃だろう、それが無いのだから山狩りしかない。

「まずは、尺八池ですやろか」

真之介にもそんなことしか思いつかない。

「ほな、悪いけど、醬油屋はんは後ろに乗つとくなはるか」

若主人は後ろの荷台を指さした。

尺八池へは北に小山を越える。名の通り、谷奥に細長く水を湛えた、灌漑用に堰き止めた溜池で、水面に背中の釈迦谷山を映して静んでいた。その際に、いまは人手に任せていたが、種治郎が遺した悪田があつた。出来の悪い田圃だつた。けれど田植え、草取り、稲刈りと、いっしょに汗を流した、スエには大事な場所だつた。オート三輪は街道を脇道に入ったが、やがて池の手前で三人はそれも捨てている。あとは菰や茅の中を行くしかなかった。

「こんなとこまで来はるやろか」

醬油屋の見習いが不安そうにいうと、

「ほんま、人の歩いたけしきもおまへんしなあ……」

若主人も、先に立つてはいたものの、出がけの張りがまるでなかった。それでもあちこち探りながら行くと水辺をかすめて、めざす悪田の畦に出た。それがさつぱり人気もなく、さらさら、早苗のそよぐ上を、ひゅーい、ひゅい、と慌て者の塩辛蜻蛉が行ったり来たり、涼し顔に遊ぶだけ。

「ここやないとすると、あとは、氷室しかないやろか」

半ば諦め顔に真之介が溢すと、

「ひっ、氷室っ？」

醤油屋の見習いが、黄色い声を上げた。

そのようにさらに二時間はかかるだろう、けものみちといってもいい、杣道が釈迦谷山の裾を巻いて北に続いていた。むかし、冬の深窟むろに固めた雪氷こおりを夏の条坊に運んだ歴史の道で、真之介には、スエに手を引かれて歩いた記憶がかすかにあった。反対に峠越えの新道は、戦後すぐに車両用に開かれた迂回路で、それを村瀬ら町会組が急いでいた。紹明も加わつての総勢九人、車で走れば分水嶺の里見峠まで三十分とかからないのに、脇道も探りながらの山狩りだから容易でない。

「朝も早よから、ほんま、申し訳ないこつてす。見つかるかどうか、とりあえず氷室までおねがいしますわ」

紹明は頭を下げた。氷室はスエの実家だつた。

やがて勾配も加わり、七曲がりから九十九折りにかかったが、路端の茂みや崖下もたしかめながら、おまけに新道といつても舗装もないただの砂利道だから余所見をすれば足も取られる。そうして峠の手前に一軒茶屋を見つけたときにはとつくに昼も過ぎていた。

「この分やと、氷室は日の暮れでんな」

遅めの昼飯に饅頭を掻き込みながら一人がいったのに村瀬が詫びた。

「すんまへんなあ。向こうでもあつちこち訊いて回らなんやろうし、遅うなるようやったら、どこぞで電話を借つて息子の車を呼びまっさかい」

そうしてまた捜しに立った。茶屋先は馬ノ背といつて、横長に小高い尾根が続いて、越えるとはつと視界が広がり、盆底のように開けた青田の中に点々と指折り算えるほどの藁葺き屋根が屋敷森に抱かれて頭を見せた。と、あとは一気に下るだけ。駆けるように先を行くと、かかりの辻堂前に三人がへたり込んでいた。

「どやった？」

わかつてはいたが、紹明は訊いてみた。

三人は首を一つに振った。

「着いたんが昼過ぎで、隣近所も訊ねて回りましたんやが、あきまへん」

昼も済んでいない様子で、

「さて、どこを捜してええもんやら……」

と若主人も匙を投げてしまった。ただ、紹明はそれも見越していたようで、

「やっぱりな」

一言いうと先に立つた。

村中を少しはずれたあたりだった。脇道に入ると小さな鳥居が見えて、草だらけの野道が山裾の杉林にまっすぐ伸びていた。

「スエサーんっ」

紹明は、奥に向かつて呼んでみた。すると、

スエサーんっ、

律儀に木霊が返事した。

草臥れてはいたが、本殿らしい祠が懸崖けがいのような岩蔭にちよこんと座り、手前の少しの平場に、それとは不釣り合いに檜皮らしい小棟が見える。長い夕陽の帯を被つて茜色に、もう一つはつきりしないが、目を凝らせば拝殿のようでもあり、どうしてこんなところに、と不思議なくらい優美な姿で凜とあつた。ほんとうかどうか、あの遠州が手がけたらしいと紹明も聞いていた。ただ、それも目当てではなかったようで、さらに奥に向かつて呼んでいる。

「スエさーんっ」

けれど、今度は木霊もない。紹明は走った。

それではじめてわかるのだが裏手が野墓地になって続いていた。杉山のわずかに開けた斜面に、隈笹に埋もれて点々と墓石らしい頭や塔婆も見える。そんな一つの陰だった。何かが動いて、みんなは一つにしんとした。

「狐やるか？」

醤油屋が身構えた。白い影は石塔を抱くように踞うすくまったまま、じつと足元を睨にらんで固まっている。まちがいない、スエだった。どれくらいそうしていたか、薄く地肌の透けた白髪頭がじつとり濡れて、乱れた髪が頬にべつとり纏わりついている。狐に憑つかれたようで気味悪かった。紹明は走った。そしてしゃがむと、小さく丸まったスエを胸の奥に抱き寄せた。

明けてもスエは早起きだった。縁側の障子戸の白みは始めるのも待ち切れないまま蒲団を出ると台所に立ち、いつもと同じに、こと、こと、支度をしていたが、どこか動作が鈍かった。真之介は隣の部屋に寢床をとってはみたものの、寝ては醒めてを繰り返して、疲れが出たのか明け方になって眠り込み、気づいたときには蒲団もなくて、慌てて台所に走り込むと、

「おはようさん」

見上げてスエは卓袱台の前にちよこんといた。

「なんや、もう起きてたんか」

真之介は拍子抜けしてしまった。

「きようぐらい、ゆつくりしとつたらええのに」

いつになく氣遣つたが、

「早よう行つてやらんと、茄子も胡瓜も死んでしまひよる」

と耳を傾けるけしきもない。昨日の騒ぎはどこへやら、スエはもう牽き売りの人だった。と
いつてあんな騒ぎがあつたばかり、元氣そうに見えるスエが、真之介にはかえつて怖かつた。

「そんなもん、一日、二日、放つといつても、どうなるもんでもないやろが」

するといつもなら、二言、三言、返つてくるのに、それが無い。昨日の今日やからな、なん
とのう体裁も悪いんやろう、いうて聞く人でもなし……、気にはなつたが勤めもあつたから顔
を洗いに三和土に降りて、下駄を突っかけ井戸端に出た。だから、てつきり畑仕事だと思つて
いた。いつものように街道を正伝庵下からバスに乗り、その日は弁当を持たなかつたから、昼
は職場近くの蕎麦屋ですませ、午後の仕事にかかろうと席に戻つたときだった。

ちりんつ、ちりんつ、

電話に出ると、下之町の駐在だった。

「川崎はん？」

「ええ」

と応えはしたが、胸が騒いだ。

「お宅の親御さんらしい人を預かってますんやが、工作中すまへんけど、ちよつと来てもらえまへんやろか」

駐在の困り果てた様子が受話器の向こうに浮かんで見えた。

駐在に走ると、机の脇、丸椅子に縮こまっている。

「どないしたんや？」

声をかけても、お縄にかかった盗つ人のようで、背中を丸めて見向きもしない。

「この先に古い水車小屋がおまつしやる、あの中にじいつとしてたらしいんですわ。近所の奥さんが見つけなはってな」

白髪頭の小柄な駐在だった。嘘のようだがあたりにはまだいくつか水車小屋が残っていた。東の大川から水を引いて、だから流れも嵩もけっこうあつて近隣農家の精米や粉挽きに現役だった。駐在は一通り経緯を話すと、日誌だろう、書きかけの分厚い綴りをばたんつと閉じた。が、どこかすつきりしない顔付きで、机を支えに腰を上げると、足が悪いのか、肩を大きく揺すりながら、真之介の傍にやつて来た。そしてスエを横目に、

「ちょっと、様子がおかしいんですわ」

耳元で囁いた。

「スエさん、どうでした？」

廊下を戻った紹明を、蒲団の上でマチ子は迎えた。日曜の午後だった。境内の裏山に下草刈りに出ようとしていたら真之介から電話があつて、行つてみると、やはりスエのことだった。

「それがなあ……」

話すのもつらそうで、

「七山送りやな」

ぼそりといった。七山と在所の名前で呼ばれていたが、以前は結核患者の避病舎だった。通うにバスもなく村から東に峠を二つ越える。それが建物も新しく眩しいほどの白亜になって、精神病棟に生まれ変わっていた。

「かわいそうにねえ……」

寝たきりのマチ子にもそんなふうにしかない。

「ああ、どうにもならんらしい」

いつもの習慣でマチ子の蒲団の縁にへたり込んだが、撫で肩をさらに丸く落として元気がな

かった。

ちよつと見にスエもふつうと変わらな、それと耳打ちされてはじめてわかる、目にいくらか落ち着きがなかつたくらい。それが夜になると人が変わった。といつて騒ぎ立てるわけでもない、ただ、いなくなつてしまふのだった。

一度そんなことがあつてから、真之介も奥の座敷の仏壇前に蒲団を並べた。そうしてスエが寝入るのをじつと待ち、気づかれないよう細紐をそつとスエの足首に括りつけ、もう一方を自分の手首に結わえて眠つた。毎晩だった。そうして、うつら、うつら、何度も紐を手繰つてはたしかめるのだが、明け方近く、ふと気がつくと手応えがなく、慌てて走ると、庭先をふらつているのはまだしも、ときには正伝庵前を街道下に彷徨ウラフラしていることも度々だった。

「しゃあないやろう」

投げようにいったのに、マチ子も言葉がなかった。

「あれに嫁でもいよつたら、ちつとは気も楽なんやろうが、なんせ、独り身やからな。毎晩、捜し回つてたんでは身が持たんやろう。今姥捨いまうばすてみたいで、酷こくな気もするが、いうて、ほかに打つ手もなし……」

理由はどうあれ、女手一つ、手塩にかけた息子に棄てられる。我が子のためと身を粉に、励んだがための心の破綻。不条理というほかなかつた。

「どんなところでしょうね」

新しい七山をマチ子は知らない。もうずいぶんになる、寝込む前、近くを訪ねて傍を通ったきり。板壁の白いペンキの長棟が四つばかり、川の字に並んで柵の垣根が高く里を隔てていたのが胸を衝いて残っている。

「いくら新しゅうなつたいうてもなあ」

思うと紹明も苦しくて、

「もうちよつと考えてからにしたらどうや、とはいうて来たんやが……」

とそこまでだった。それからいくらもしない、スエは七山送りになつている。

聞いてさつそく紹明も様子看に出かけた。どないしよるかなあ、スエさん……。久しぶりだった。だから面会ぐらいはできるものと思つていた。それがさりと追われている。身内以外は会わせられないというのだった。手にはマチ子にいわれて金鍔を、街道下の饅頭屋で買つていた。スエの大的好物だったが、風呂敷包みもそのままに、てく、てく、野道を戻っている。

二度目に行つたのは年の暮れ、明け方からの小雪の中を、嫌な役回りだったが真之介の運転に付き添つて、戻るスエは荷台の人だった。門口にオート三輪をつけると、二人、頭と足に分かれて担ぎ、奥の座敷の仏壇前の、白い蒲団にそつと寝かせた。病院の方でも体を拭いてくれくらゐはあつたらしく、目立つて汚れはなかつたが、石炭酸のきつい臭いが鼻を衝いた。

「これ、何ですやろ？」

体をあちこち、探るようにしていた真之介がスエの手首をさしていった。澄まし顔に印を結んでいる、その袖口だった。赤いというより、何かに擦れでもしたか、焦げたように皮膚が黒く斑に腫れ、かすかに縄目のような痕も見える。

まさか！ 蒲団の裾を擦ねると足首にも、同じように踝あたりに筋目があつて、こちらはかなり凹んで、どす黒く皮膚の色が変わつていた。それでも、簡単だったが湯灌もすませ、手甲脚絆の白装束に包んでやると、スエもきれいになった。

「和尚さん、おねがいます」

突然、真之介が背筋を正したのに、紹明が目を丸くした。

「急に何やいな？」

「葬斂ですよ」

両手を畳に、めずらしく、きりりといった。

「おねがいます、引導を渡してやってください」

スエも胸に手を合わせていた。

眷属といつても何もない。だから知らせるところもなく、すると通夜はほんとうに寂しくなつた。隣近所七、八軒が、それも代替わりしていたから、真之介と同年輩か少し上の後取りが、

最期の送りだからと夫婦連れで香典片手にやって来ただけ。決まり文句を口籠もつては帰っていった。それに町会筋から算えるほどが五月雨に続いて、気がつけばスエを前に、また二人になつた。

それからどれくらいか、

「和尚さん、これ？ 付き合っていただけですか」

小用だと思つていたからびつくりしたが、戻つた真之介は、一升瓶を小脇に立つていた。思はず紹明も口元が緩んだ。

「ちよつと早い気もするが、まあ、ええか」

いっではみたが、最初からそのつもりでいた。「今夜は帰らんかも知れん」、マチ子との早めの薬石をすませると、そういつて忙しく袈裟を引つかける紹明に、「わかつてますよ」とマチ子は送り出していた。だから真之介に、気が利かなければ催促するつもりでいた。

「考えてみたら、和尚さんとこないしてやるんもはじめてですね」
うれしそうにした。

不寝番に酒は付きものだった。亡骸を守つて長い夜、少しの畏怖もあつただろう、退屈凌ぎに、ちびり、ちびり、やるのだが、あれやこれや、死人の昔話にあつという間に夜が明けた。ただ不思議とそこに女はいなかった。どこを見ても無骨者ばかり、氣馴れた同士が酒瓶囲んで

車座に……、と、いつもなら、ぐだ、ぐだ、管を巻いて、なかには大虎も出るというのに、その夜に限って音無しく、誰もが素面しらふのまま、しんみり、東の空が白んでいく。

「だいぶ明るなつてきましたね」

障子戸に、ゆらり、ゆらり、小枝の影がさしていた。

「ああ」

不思議な気怠けだるさだった。スエも、じつと静かにいる。夢でも見ているようだった。

「よう寝てる」

にっこりいつて紹明は、そつと頬に触れてみた。瞬間、ぞくつと冷たいものが背筋を走った。思いとは裏腹に体は正直だった。けれどすぐにそれも消え、弛んだ肌が、しっとり、指に纏わりついた。わずかだが臉回りや口元が鉛色に透けはじめている。

「真之介や、すまんが、もういつぺん、化粧を直してやつてくれんか」

スエを思っただけではない。

母子二人、これが最後になるやろう……、

そんな気がして、

「わしゃあ、ちよつと戻るよつて」

と部屋を出たのだった。

断わり、表紙のイラストは小林春規さんの版画『野菜売—鷹ヶ
峯』をデフォルメして使わせていただきました